

第6章

中国東北部・大興安嶺におけるトナカイ飼養の技法

-エヴェンキ族の生業とその背景-

卯田 宗平

要約：

中国東北部・大興安嶺森林地帯にはトナカイ飼養に従事するエヴェンキ族らがいる。かつて、エヴェンキ族らは大興安嶺において狩猟と漁撈、トナカイ飼養といういわゆる“北方の三位一体”の生業様式を続けていた。しかし、現在、彼らは移住・定住政策や大興安嶺天然林保護政策などの影響で狩猟および漁撈を一切おこなっていない。

こうしたなか、狩猟時の駄獣や乗用獣として利用されてきたトナカイはその役割を終えたかにみえた。しかし、エヴェンキ族らは狩猟と漁撈という“三位一体”のなかの“二位”がなくなった現在でもトナカイの飼養を続けている。それは、トナカイの角を毎年採取し、漢族や観光客に販売するためである。

トナカイの角は中国においてさまざまな薬効があるとされ、高い商品価値をもつ。エヴェンキ族らはその角を販売することで生計を維持しているのである。角の採取と販売のためにトナカイを飼養することは、肉生産を主目的とするツンドラのトナカイ牧畜と大きく異なる。本章では、こうした特徴をもつ中国・大興安嶺のトナカイ飼養の技法を概観する。

キーワード：

エヴェンキ族， トナカイ飼養， 大興安嶺， odachi 作業， 中薬

はじめに

第1節 移住・定住政策とエヴェンキ族の生活変容

第2節 トナカイ飼養の技法

第3節 トナカイ飼養の背景

おわりに

はじめに

中国東北部・大興安嶺森林地帯には、ツングース系言語を操り、トナカイ (*Rangifer tarandus valentinae*) を飼養しながら生計を維持するエヴェンキ族が生活している¹。ツングース系民族が住むシベリア・極北から東北アジア地域の生業を調べた人類学の成果によると、この地域の生業は大きく以下の六つに分類できる[岡・境田・佐々木 2009, 308]。それは、①タイガでの狩猟、②北極海沿岸海獣の狩猟、③アムール川などの大河川流域での漁撈、④小規模のトナカイ群を交通手段として利用しながら狩猟採集に依存するタイガの狩猟・トナカイ飼養、⑤肉生産を主目的とするツンドラのトナカイ牧畜、⑥ステップおよび森林での牧畜と農耕、という六つである。

中国のエヴェンキ族の生業様式を上記の生業類型にあてはめると④に該当した。彼らは、かつて狩猟と漁撈、トナカイ飼養といういわゆる“北方の三位一体”の生業様式を続けていた。ここで「該当した」と過去形で記したのは、現在、エヴェンキ族はそうした生活を営んでいないからである。現在のエヴェンキ族は、移住・定住政策や大興安嶺天然林保護政策（いわゆる“天保工程”）、地方政府による狩猟用の銃の没収などが原因で狩猟および漁撈活動を一切おこなっていない。

こうした生活・生業様式の変容のなか、狩猟時に駄獣や乗用獣として利用されてきたトナカイはその役割を終えたかにみえた。しかし、エヴェンキ族の人たちは狩猟と漁撈という“三位一体”のなかの“二位”がなくなった現在でもトナカイの飼養を続けている。

エヴェンキ族がいまでもトナカイ飼養を続けるのはトナカイの角を採取し、仲買人や業者に販売するためである。中国では、主に自然由来の産物からなり、体質の改善や体調の維持のために服用される薬を「中薬」と総称する。中国ではこの中薬の市場が発達しており、トナカイの角にも「補精神（精力を増強する）」や「助腎臓（腎臓の機能を助ける）」「強筋健骨（筋肉や骨格を強く健康的なものにする）」といった効能があるとされる。そして、中国ではこうした薬効があるトナカイの角に高い商品価値がある。

こうしたなか、エヴェンキ族の人たちはトナカイを殺さず、角を毎年採取し、それを販売することで生計を維持しているのである。角を販売するためにトナカイを飼養することは、肉生産を主目的とするツンドラのトナカイ牧畜と大きく異なる。

本章では、こうした特徴をもつ中国・大興安嶺のトナカイ飼養の技法を概観する。とくに、中国・エヴェンキ族らのトナカイ飼養では、飼養民がトナカイの角を切るために至近距離で接近するが、その人間を恐れない個体をつくることが重要である。本章では、そうした馴化個体をつくる“odachi”と呼ばれる技法に着目し、飼養民たち

が「トナカイの個体に触れうる親和性」をいかに確立させているのかをみてみたい。
なお、本章の内容は2010年7～8月、2011年7～8月、2012年7～8月におこなった現地調査の結果に基づいている。

第1節 移住・定住政策とエヴェンキ族の生活変容

1. エヴェンキ民族郷

調査対象地は内モンゴル自治区呼倫貝爾市根河市(図1)のエヴェンキ民族郷(以下、E民族郷)である。E民族郷がある根河市は北緯50度20分から50度30分、東経120度12分から122度55分に位置し、南北が240.4キロメートル、東西が198.8キロメートル、面積は2万平方キロメートルである。市の平均海拔は1,000メートル前後である。この市は大興安嶺森林地帯の西側に位置し、市の面積に占める森林被覆率は70パーセントを超える。市の名前にもなっている根河は大興安嶺の伊吉奇山の西南側を水源とする全長427.9キロメートルの河川である。

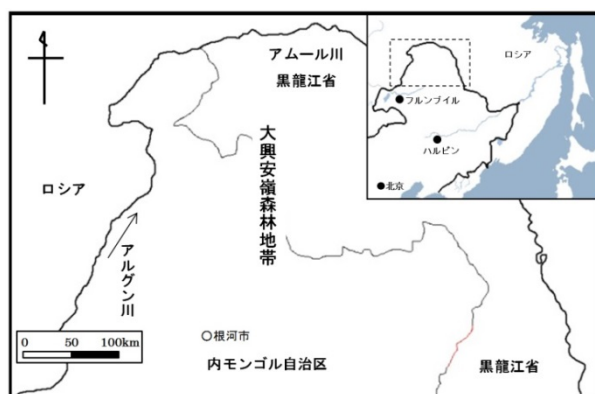


図1 大興安嶺森林地帯の位置

この根河市のひとつの特徴は内モンゴル自治区のなかで年平均気温が最も低いことである。表1は、根河市の月別の平均気温と降水量をまとめたものである。根河市の年間の平均気温はマイナス5.3℃である。一月の平均気温はマイナス30.4℃であり、年間を通じて最も低い。一方、平均気温が最も高いのは7月であり、気温は16.5℃である。根河市が属する呼倫貝爾市の気象局は、この地域の気象条件に合わせて四季を以下のように定義している。それは、日の平均気温が0℃を上回ると“春の始まり”とし、0℃を下回ると“秋の終わり”とする。また、日の平均気温が15℃を上回ると“夏の始まり”とし、15℃を下回ると“夏の終わり”とする。

呼倫貝爾市気象局の定義を踏まえると、根河市の四季は夏季が約 20 日間、春季と秋季が約 125 日間、冬季が約 220 日間となる。また、根河市の年間の降水量は 437.4 ミリメートルである。6 月から 9 月までの降水量は 348 ミリメートルで年間降水量の 79.5 パーセントを占める。一方、冬季の降水量は少ない。このように、根河市の気候は短く雨が多い夏季と長く寒い冬季を特徴とする。

表 1 根河市の月別の平均気温および平均降水量

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
気温 (°C)	-30.4	-26.1	-15	-1.8	7.6	14.1	16.5	13.8	6.7	-3.1	-17.4	-28.2
降水量 (mm)	3.2	3.5	6.8	17.4	32	67.3	126.5	101.1	53.1	12.5	8.1	5.9

(出所)『根河市志』より筆者作成。

次に根河市の人口をみてみたい。市の定住人口は 16 万 7228 人（男性が 50.6 パーセント、女性が 49.3 パーセント）である（2005 年時点）。市の総人口に占める漢族の割合は 88.2 パーセントである。根河市には、大多数を占める漢族のほかにモンゴル族（根河市総人口に占めるモンゴル族の割合は 5.9 パーセント）や満族（2.4 パーセント）、回族（2 パーセント）、ダウール族（0.5 パーセント）、朝鮮族（0.3 パーセント）、エヴェンキ族（0.2 パーセント）など計 17 の少数民族がいる。現在、根河市には多くの漢族が定住しているが、これは清末に入植抑制政策が崩壊し、山東省や河北省から漢族が大量に移住してきたからである。

本章で取りあげる E 民族郷は根河市の中心部から 4 キロメートル離れた位置にある。この民族郷には計 59 戸、162 人が住む（2012 年時点）。表 2 は、E 民族郷の住民の年齢構成と民族をまとめたものである。この民族郷にはエヴェンキ族が計 107 人（全体の 66 パーセント）、それ以外の人びとが計 55 人住んでいる。表 2 をみても分かるが、29 歳以下の人口は計 58 人であるが、そのなかでエヴェンキ族は 48 人（割合にして 83 パーセント）である。とくに 9 歳以下の子どもは一人を除いてすべてエヴェンキ族である。一方、その親世代といえる 30 歳から 59 歳は計 85 人いるが、そのなかでエヴェンキ族は 47 人（割合にして 55 パーセント）である。

このように年齢区分別でエヴェンキ族の割合が大きく異なるのは、少数民族に対する中国政府の優遇政策が影響していると考えられる。現在、中央政府は民族地区における少数民族の発展を重視しており、彼らに対して各種の優遇措置を実施している。とくに、民族の総人口が 30 万人を下回る 28 の少数民族に対しては社会保障や学校教育、医療などの面でさまざまな優遇がなされている。そのため、例えばエヴェンキ族と漢族の二人が結婚した場合、生まれた子供の民族をエヴェンキ族とすることで各種

優遇措置を享受しようとする人が多いのである。

表2 民族郷の住民の年齢及び民族構成

年齢	男性		女性	
	エヴェンキ族	それ以外	エヴェンキ族	それ以外
80-	-	-	3	1
70-79	2	-	1	1
60-69	1	4	5	1
50-59	2	4	5	1
40-49	7	9	8	6
30-39	12	9	13	9
20-29	8	3	10	1
10-19	9	1	9	4
9-	6	1	6	-
計	47	31	60	24

(出所) 現地調査の結果より筆者作成。

表3はE民族郷内の39世帯の夫婦の民族をまとめたものである。夫婦二人が同じ民族の世帯は計11組ある。具体的には、エヴェンキ族同士の婚姻が8組、漢族同士の婚姻が2組、モンゴル族同士の婚姻が1組である。一方、夫婦二人が異なる民族の世帯は計28組ある。具体的には、夫がエヴェンキ族で妻が漢族の世帯が7組、夫がエヴェンキ族で妻がオロチョン族の世帯が1組、夫が漢族で妻がエヴェンキ族の世帯が16組、夫が漢族で妻がロシア族、夫が漢族で妻が満州族、夫がロシア族で妻がエヴェンキ族、夫がモンゴル族で妻がエヴェンキ族の世帯が各1組である。

表3 E民族郷における夫婦二人の民族

夫 \ 妻	エヴェンキ族	漢族	オロチョン族	ロシア族	モンゴル族	満州族	計
	エヴェンキ族	8	7	1	-	-	-
漢族	16	2	-	1	-	1	20
ロシア族	1	-	-	-	-	-	1
モンゴル族	1	-	-	-	1	-	2
計	26	25	4	1	1	1	39

(出所) 現地調査の結果より筆者作成。

表 3 から以下のことが分かる。①夫婦二人がエヴェンキ族の世帯は 8 組のみであり全体の約 2 割でしかない。②夫が漢族，妻がエヴェンキ族の世帯は 16 組ある。これは漢族の男性が E 民族郷に婚入してくるケースが多いことを示している。③漢族の女性が E 民族村に婚入したケースも 7 世帯ある。④E 民族郷においてエヴェンキ族と漢族以外の少数民族は多くない。

2. E 民族郷の変化

大興安嶺森林地帯でトナカイ飼養を続ける人たちは，中央や地方政府が主導する定住政策や観光開発，天然林保護政策などの影響を大きく受けながら生活を営んできた。ここでは，狩猟活動やトナカイ飼養に従事してきたエヴェンキ族が住む E 民族郷の時代的な変容をみてみたい。民族郷の変容は，定住政策の実施とそれに伴う生活様式の変化に応じて三つの段階に分けることができる。三つの段階とは，(1)奇乾における定住（1957 年から），(2)満歸への移住（1965 年），(3)根河への移住（2003 年）である。以下では，著者の調査および既往研究の成果[中国人民大会民族委員会 1958；秋 1961；卡 2006；祁 2006；王 2012]を踏まえ，定住・移住政策と E 民族郷の変化をみてみたい。

(1) 奇乾における定住（1957 年から）

1957 年 2 月，呼倫貝爾盟第二回人民代表大会においてアルグン川右岸の奇乾にエヴェンキ族民族郷を建設することが決定された。ソ連との国境沿いの奇乾に住居を新たに建設し，エヴェンキ族を定住させる政策は，狩猟と漁撈，役畜としてのトナカイの飼養で生計を維持してきた当人たちの生活様式を大きく変えるものであった。なぜなら，彼らはそれまで定まった住居を持たず，大興安嶺森林地帯において移動を繰り返しながら狩猟活動をおこなっていたからである。ただ，定住先に指定された奇乾はエヴェンキ族にとってまったく見知らぬ土地ではなかった。

ソ連と隣接する奇乾では，当時，交易市が 1～2 か月に一度開かれていた。奇乾での交易市において，エヴェンキ族は狩猟活動で得た肉や角，皮製品を販売し，生活用品や狩猟道具などを購入していたからである。奇乾においてエヴェンキ族の主な交易の相手はソ連人であった。ソ連人は，ヘラジカの角や燻製肉，エヴェンキ族の女性が作る皮製の手袋や靴，服などを購入していた。とくに，ソ連人は左右対称のヘラジカの角を壁飾り用として高値で購入していたという。

一方，エヴェンキ族はソ連人から銃や銃弾，薬きょう，タバコ，パン，酒，茶，薬，塩，砂糖，フライパンなどを購入していた。当時，エヴェンキ族は主に狩猟で使用する銃弾と薬きょう，主食であるパンの原料となる小麦粉を多く購入していたという。

奇乾での交易では中国人民元を持たないソ連人が多くいたため、主に物々交換によって必要品を入手していた。

1957年に奇乾に建設されたエヴェンキ民族郷には30～40世帯、200人前後が定住を始めた。民族郷には木造の家屋のほか、寄宿制の学校や衛生院（病院）、日用品を販売する商店、食料販売店などがあつた。商店や食料販売店は漢族が経営していたという。この時代、狩猟活動に従事するエヴェンキ族は、民族郷に住居をもちつつも大興安嶺に点在するキャンプ地を拠点とし、そこで狩猟を続けていた。この時代、彼らは荷駄引き用や騎乗用として一世帯あたり10頭前後のトナカイを飼育していた。そして、彼らはキャンプ地で燻製肉や皮製品を準備し、1～2か月に一度開かれる交易市に合わせて奇乾まで戻り、それら商品を販売していた。エヴェンキ族が奇乾に定住した後もしばらくの間はソ連人が交易の主な相手であつた。

その後、ソ連のフルシチョフによる平和共存路線の提起やスターリン批判に端を発した中ソ関係の悪化は、ソ連人を交易の相手として成立していたエヴェンキ族の狩猟活動にも少なからず影響を与えた。とくに、1960年4月に中国共産党指導部がソ連の平和共存政策（対米接近政策）を修正主義だとして強く非難したが、これに対してソ連は中国指導部によるこの声明に激しく反発した。そして、ソ連政府は1960年7月より中国に派遣していた技術者や専門家、その家族を引き上げさせた。

こうした中ソ関係の悪化によって、ソ連人は交易市が開かれる奇乾と自国との自由な往来ができなくなった。この結果、エヴェンキ族は交易の最大の相手を失うことになったのである。ただ、エヴェンキ族とソ連人との交易が難しくなった頃から中国の漢族が奇乾までやってきて、燻製肉や皮製品を購入するようになった。その後、漢族は奇乾の民族郷に商店を開き、そこで日用品を販売するとともに狩猟の獲物や皮製品の買い取りも始めた。エヴェンキ族と漢族の売買関係は中ソ関係が悪化しはじめた頃から密になったのである。

（2）満歸鎮への移住

1964年、根河市地方政府は奇乾に住むエヴェンキ族に対して二回目の定住政策を実施した。政府は、根河市阿龍山鎮に住居や食堂、衛生院などを整備した臨時の居住地を建設し、まずそこにエヴェンキ族を移住させた。その後、根河市政府は1966年5月に根河市満歸鎮²の中心部から17キロメートル離れた場所に“満歸エヴェンキ民族郷”を建設し、阿龍山鎮に住むエヴェンキ族を満歸鎮に再度移住させた。この民族郷には、30戸の木造家屋のほか、郷政府や学校、医療施設、商店、食糧店、銀行、郵便局などがあつた。このなかで商店や食糧店などは漢族が経営していた。この民族郷にはエヴェンキ族や漢族のほか、モンゴル族、ロシア族などの少数民族も住んでいた。

また、この時代、大興安嶺の豊かな森林資源を利用した木材加工工場も民族郷に建設された。1970年代初めには民族郷の総人口が378人であったが、そのなかで木材加工業やサービス業に従事するものが215人であった。

満歸エヴェンキ民族郷での生活は集団化政策の影響を大きく受けることになった。とくに、この時代はエヴェンキ族による狩猟活動が組織化され、また狩猟活動以外にも農耕や家畜飼育も始めるようになった。

1967年、エヴェンキ民族郷では人民公社が設立され、その下部組織として東方紅獵民生産隊が組織された。そして、大興安嶺森林地帯で狩猟活動を続けるエヴェンキ族らはすべて東方紅獵民生産隊に所属するようになった。実際の狩猟活動は、生産隊の下部にあるいくつかの生産小隊をひとつの単位としておこなわれるようになった。人民公社の設立以降、狩猟道具やトナカイといった生産手段の私的所有は認められず、それらはすべて集団の所有物となった。そして、集団所有となったトナカイは個々の生産小隊によって管理されるようになった。

この時代、大興安嶺には五つのキャンプ地があり、そこで狩猟が続けられていた。狩猟に従事するものに対しては日々の労働に応じた給与が支払われるようになった。年間を通じて多くの収入があった小組には年度末（春節前）にボーナスも支給された。また、集団化政策が実施されると燻製肉や皮製品を個人で販売することも禁止され、そうした商品は東方紅獵民生産隊によってすべて買い取られることになった。

この時代のもうひとつの変化は、地方政府による“狩猟を中心に、農業や牧畜もおこなうこと”という指示のもと、エヴェンキ族らも農作物の栽培や家畜動物の飼育を開始したことである。彼らは、政府の指導のもとで温室を建て、ハクサイやキュウリ、トウガラシ、コムギ、トウモロコシなどの栽培を開始した。ただ、満歸鎮は大興安嶺の北西部に位置し、年間の平均気温は0℃を下回り、夏季は短く、降雪日は年間160日を超える。こうした気候条件下での農作物の栽培はたいへん困難であり、コムギとトウモロコシの栽培は成功しなかったという。このほか、民族郷に住む人たちはウシやウマ、ブタの舎飼もはじめることになった。

（3）根河市中心部への移住

2003年8月、それまで満歸エヴェンキ民族郷で生活をしてきた人たちは生態移民として根河市中心部に新たに建設された民族郷に移住することになった。これは、天然林保護工程が実施されている大興安嶺で狩猟をおこなうエヴェンキ族を生態移民として根河市中心部に移住させることが根河市政府において決定されたからである。

中央や地方政府が特定の人びとを生態移民として認定し、移住政策を進める理由は大きく二つある。ひとつは、ある地域の自然環境を保護することを目的に、もともと

そこに住んでいた人びとを別の場所に移住させることである。もうひとつは、環境劣化の影響で生活水準が低下した住民を別の場所に移住させることで生活の改善を目指すものである[孟・包 2004]。

このように生態移民政策は生態環境の保護と農牧民の貧困対策という二つの目的が内包されており、「生態環境を保護するための各種政策のなかで、生態移民政策はコストが比較的少なく、かつ効果が大きいもののひとつである」[孟・包 2004:49]とされている。満歸鎮から根河市中心部にエヴェンキ族を移住させた生態移民政策は、大興安嶺森林地帯の自然環境を保護するとともに少数民族の生活水準の向上を目指したものであり、上記の二つの目的を内包したものである。

根河市政府は2002年から市中心部より3キロメートル離れた林場に新たな民族郷を建設しはじめた。敷地内に建てられた木造の家屋は一階部分が50平方メートル、二階部分が38平方メートルであり、室内にはキッチンやトイレ、温水シャワー室などが完備されている。また、上下水道や電気、有線なども整備されている。そのほか、民族郷の敷地内には保健所や老人ホーム、小学校、郵便局、銀行なども建設された。そして、2003年8月、完成した民族郷に満歸鎮からエヴェンキ族や漢族、モンゴル族の住民が移住してきたのである。

根河市中心部への移住後の大きな変化は狩猟で使用する銃の所有が全面的に禁止されたことである。それまで、銃の所有はすべて免許制であり、狩猟に従事するエヴェンキ族の男性のみが所有していた。その後、市政府はエヴェンキ族が市中心部に移住することを理由に狩猟用の銃をすべて没収したのである。狩猟用の銃の没収により、エヴェンキ族が大興安嶺森林地帯で長年続けてきた狩猟活動は終了した。

第2節 トナカイ飼養の技法

1. トナカイ飼養の現状

本項では中国エヴェンキ族らによるトナカイ飼養の技法をみてみたい。まず大興安嶺におけるトナカイ飼養の現状を概観し、次にトナカイ飼養の年間の生業暦をまとめる。その上で大興安嶺のトナカイ飼養において重要だと考えられている“odachi”（人間に馴らす）の技法についてみてみたい。

大興安嶺森林地帯においてエヴェンキ族らが飼養するトナカイは南モンゴルから北モンゴルおよびアルタイ山脈に分布するもので、シベリアの森林トナカイと呼ばれるものである。2012年現在、大興安嶺森林地帯にはトナカイキャンプ地が計8か所ある。

表4は8か所のキャンプ地の名称とトナカイ飼養に従事している人たちの属性、地点、所有するトナカイの頭数をまとめたものである。

表4 8か所のトナカイキャンプ地の名称と構成員

名称	構成員	地点	所有数
MLYS	計6人（男性4人，女性2人），平均年齢：56.8歳 民族：エヴェンキ族5名，漢族1名	阿龍山	300-400
DML	計7人（男性2人，女性5人），平均年齢：45.7歳 民族：エヴェンキ族6名，オロチョン族1名	達頼沟	140-150
DW	計2人（男性1人，女性1人），平均年齢：42.5歳 民族：エヴェンキ族	嘎拉牙	80
SS	計3人（男性1人，女性2人），平均年齢：43.3歳 民族：エヴェンキ族	鳥力庫瑪	30
BDX	計3人（男性2人，女性1人），平均年齢：41.3歳 民族：漢族2人，エヴェンキ族1人	上央格気	40-50
YSH	計2人（男性1人，女性1人），平均年齢：44.5歳 民族：モンゴル族	阿龍山	20-30
SYL	計2人（男性1人，女性1人），平均年齢：35.5歳 民族：エヴェンキ族，漢族	得耳布	40
BLJY	計4人（男性2人，女性2人），平均年齢：51.7歳 民族：エヴェンキ族3人，漢族	阿龍山	40

（出所）現地調査の結果より筆者作成。

キャンプ地でトナカイ飼養に従事する人は計29人（男性14人，女性15人）であり，その平均年齢は47歳である。最高齢はMLYSキャンプ地のMLYS氏（女性）で90歳である。もっとも若いものはMLYSキャンプ地のMR氏（男性）で20歳である。一般にキャンプ地の名称は，そこに滞在するメンバーのなかで最年長の女性の名前を使用する。MLYSやDML，BDX，SYL，BLJYといった名称はいずれも年長女性の名前である。一方，DW，SS，YSHは最近になってトナカイ飼養を始めた世帯で構成されており，彼らのキャンプ地の名称は世帯主の男性の名前を使用している。トナカイ飼養に従事している人たちの民族をみると，エヴェンキ族が21人，漢族が5人，モンゴル族が2人，オロチョン族が1人である。

キャンプ地で飼養されているトナカイは計700～800頭である。もっとも多くトナカ

イを飼育しているのは MLYS キャンプ地であり、その所有数は 300～400 頭である。次いで DML キャンプ地が 140 頭前後を所有している。一方、トナカイ飼養に従事する人が少ない YSH や SS キャンプ地では所有数が 20～30 頭程度である。トナカイ飼養に従事するものは郷政府が無償で提供するテントを利用できる。また、森林地帯に点在する各キャンプ地には敷地内に太陽光発電装置があり、それで得た電気でテレビやラジオも使用できる。次でも述べるが飼養民たちはキャンプ地の周辺にトナカイのエサとなるトナカイゴケ (*Cladonia rangiferina*) が少なくなるとキャンプ地を移動する。移動にはテントやベッド、テレビ、薪を燃料とする暖房器具などの運搬を伴うため多大な労力が必要になる。そのため、郷政府は山中を移動する飼養民のために大型トラックを貸し出し、移動をよりスムーズにおこなえるように補助をしている。

2. トナカイ飼養の年間の生業暦

次にトナカイ飼養の年間の生業暦をみておきたい。

トナカイ飼養に従事する人たちは山中でエサを食むトナカイを探す作業（“onno” と呼ばれる）を繰り返しおこなう。大興安嶺が雪に覆われる 11 月から 3 月にかけて、飼養民たちは雪上に残された足跡（oja）などを手がかりにしながら徒歩でトナカイを探す。そして、森林のなかで群れているトナカイをみつけると、5～7 人が一組となってその群れを囲い込み、群れのなかにいる数頭のメスをまず捕まえる。そして、彼らは捕まえたメスを紐で引きながらキャンプ地まで連れ戻す。すると、群れのほかのトナカイも先導するメスに追従するかたちでキャンプ地まで戻ってくる。

トナカイの群れをキャンプ地まで連れ戻した後、飼養民たちはトナカイに塩を与える。彼らは、手のひらの塩をなめにきたトナカイを一頭一頭なでてやりながら、そのトナカイの体調や怪我の有無などを確認する。彼らは、トナカイをキャンプ地まで連れ戻すが、そのトナカイを紐などで木に繋ぎ止めておくようなことはしない。そのため、連れ戻されたトナカイはエサを求めて森林のなかに戻る。飼養民たちは、再び森林のなかに入っていくトナカイに対してとくに何も介入しない。数日が過ぎるとキャンプ地のまわりにトナカイが一頭もいなくなることもある。すると飼養民たちは、どこかに移動したトナカイを探しに行くのである。冬季、この onno 作業は 7～10 日に一度ほどおこなわれる。大興安嶺のトナカイ飼養民たちはスノーモービルなどを使用せず、雪上を徒歩で移動する。時には何日もトナカイを発見できない日が続くこともある。

4 月中旬になるとトナカイは出産のシーズンを迎える。トナカイは平坦な場所を好んで出産するため、飼養民たちは毎年 4 月上旬になるとキャンプ地を平坦な場所に移動

させる。また、この時期になると、出産を控えた腹の大きな母トナカイを探し、キャンプ地まで連れ戻す。これは、母トナカイにできるだけキャンプ地の近くで出産させるためである。母トナカイがキャンプ地から遠く離れた場所に出産すると、次に述べる odachi 作業（人間に馴らす作業）ができないからである。

出産シーズンが終わり、5月下旬になると飼養民たちはトナカイの角を切る作業をおこなう。トナカイの角は毎年晩冬のころに脱落したあと新生し、5～7月にかけてさらに大きくなる。この時期の角は皮膚に覆われており、柔らかいこぶ状である。8月を過ぎると角を覆う皮膚が落ちる。皮膚が落ちた角の商品価値は5～7月頃の柔らかい角のそれよりも低い。そのため、飼養民たちは5～7月にトナカイの角を切断し、仲買人や業者に販売するのである。

トナカイの角を切断する作業はすべて男性によっておこなわれる。この時期、彼らは大きな角をもつトナカイを群れのなかから探しだして捕まえ、数人の男性が抱え込む。そして、一人の男性が小型のノコギリで角を切断するのである。血液が循環しているこの時期の角はノコギリで根元から簡単に切断できる。角を切断したあと、彼らはトナカイの頭部の切断面が化膿しないように灰を擦りつける。そして、彼らは切り取った角の重さを量り、その角を仲買人に販売するか加工工場に運ぶのである。

6月下旬ごろになると大興安嶺は少し暖かくなる。ただ、気温の上昇とともに山中では蚊が発生する。森林内で蚊が発生するこの季節、飼養民たちは“rarupuka”と呼ばれるオオミズゴケ (*phagnum palustre*) を集め、キャンプ地の周辺に積み上げて乾燥させる。そして、ある程度乾燥すると火をつけて煙を起こす。オオミズゴケの煙には除虫効果があるというのである。実際、キャンプ地の周囲 3～4 か所で煙を起こすと、蚊を嫌がるトナカイが森林内から煙のまわりに集まる。この時期、飼養民たちは一日中、rarupuka を燃やし続ける。トナカイは森林のなかにエサを探しに行くが、蚊を嫌がるのか再び rarupuka の煙のまわりに戻る個体が多い。

もちろん、トナカイのなかにはキャンプ地から遠く離れた場所にエサを求めて移動し、キャンプ地に戻らない個体もいる。そのため、飼養民たちは、この時期も3～5日に一度ほど onno 作業をおこなう。夏季にトナカイを探す作業は冬季のそれよりも難しいと著者は感じた。それは、冬季になると雪上に残されているトナカイの足跡を追って移動ルートのある程度特定できるが、夏季はトナカイの足跡をほとんど判別できない。トナカイの移動の痕跡が少ない夏季になると、飼養民たちは遠くで聞こえる鈴の音やトナカイの移動によって倒されたと思われる草木を手がかりに、草木の生い茂った湿地のなかを徒歩で探し続ける必要があるからである。

9月はトナカイの交配の季節である。飼養民たちはトナカイが発情期を迎える前に直径約 30m、高さ約 2m の柵 (kure) をつくる。そして、彼らは夜間に柵のなかに仔トナ

カイを入れ、発情し攻撃的になったオスのトナカイから守ろうとする。夜間、母トナカイは柵のなかに入れず、外に放しておく。飼養民たちは、朝になると柵のまわりにいる母トナカイを捕まえ、柵のなかに入れる。そして、仔トナカイを柵の外に出す。仔トナカイはしばらくの間は母トナカイがいる柵のまわりを動き回るが、やがてエサを求めて森林のなかには消える。その後、仔トナカイは2~3時間もすると再び母トナカイのいる柵に戻ってくる。すると、飼養民たちは仔トナカイを捕まえて柵のなかに入れ、母トナカイを柵の外にだす。この時期、彼らは母子のトナカイをこのように飼育する。

トナカイの繁殖シーズンが終わり、10月を過ぎる大興安嶺の気温は急激に下がる。飼養民たちは長く厳しい冬を迎える前にキャンプ地を再び移動させる。冬季のキャンプ地に適した場所は、①水源が近くにあり、②トナカイのエサとなるトナカイコケが多く、③木が密生しており北風を防ぐことができる地点である。彼らは、郷政府が用意する大型トラックにテントや太陽光発電装置、テレビ、寝具、生活用品などを載せて新たなキャンプ地に移動する。その後、彼らはトナカイの群れも新たなキャンプ地に引き連れてくる。キャンプ地を移動したあと、彼らは前記したように5~7日に一度ほど onno 作業を繰り返すのである。

3. 人間に馴らすための odachi 技法

飼養民たちはトナカイの飼養に関して「odachi 作業をしっかりとおこなうことが大切。さもないと jikei になり、手に負えなくなるから」という。彼らがいう odachi 作業とは生後間もない幼い個体に人為的な介入をおこない、仔トナカイを人間に馴れさせる作業のことである。また、“jikei”とは仔トナカイに odachi 作業ができず、人間に馴れないまま成長した個体のことである。つまり、彼らは「トナカイを人間に馴らすことが重要である」と言っているのである。以下では、中国のトナカイ飼養において重要な生業技術だと考えられる odachi の技法について具体的にみてみたい。

トナカイの出産は前記のように4月中旬ごろから始まる。飼養民たちは4月になると母トナカイが出産しやすいように平坦な場所にキャンプ地を移動させる。そして、彼らは腹が大きくなった母トナカイをキャンプ地の近くに連れてくる。これは、母トナカイにできるだけキャンプ地の近くで出産させるためである。

キャンプ地の近くに連れてこられた母トナカイは、出産間際になるとキャンプ地から離れた場所に移動する。そして、人目の付かないところで出産し、仔トナカイを連れて再びキャンプ地に戻ってくる。母トナカイが仔トナカイを連れてキャンプ地まで戻ってくると、飼養民たちは手のひらに塩を持ち、母トナカイに塩を与える素振りを

みせて近寄ってきた母トナカイを捕まえる。そして、母トナカイを紐で木に繫留する。母トナカイはすでに人間との親和性がある程度確立されているため簡単に捕まえることができる。

母トナカイを木に繫ぎ止めた後、飼養民たちは母トナカイのまわりで動きまわる仔トナカイを捕まえようとする。しかし、仔トナカイは人間に馴れていないため、飼養民たちが少し接近するだけで遠くに逃げてしまう。彼らは6~7人が一組になり、両手を大きく広げて仔トナカイに近づき、あちこち逃げまわる仔トナカイを徐々に囲い込む。そして、投げ縄で仔トナカイを捕らえ、数人で抑え込んで首ひも（comatton）を付ける。

その後、彼らは仔トナカイを母トナカイの近くに連れていき、紐で木に繫ぎ止める。そして、母子の授乳・哺乳を自然に任せる。しばらくすると、彼らは繫ぎ止めていた母トナカイを放つ。自由になった母トナカイは仔トナカイのまわりにしばらくいるが、やがてエサを探しに行く。その後、2~3時間もするとエサを食べ終えたと思われる母トナカイが仔トナカイのところに戻ってくる。

飼養民たちは、キャンプ地に戻ってきた母トナカイを捕まえ、再び仔トナカイの近くに繫ぎ止める。そして、しばらくすると再び仔トナカイを放つ。仔トナカイはやがて森林のなかに消えるが2~3時間もすると再び母トナカイのところまで戻ってくる。仔トナカイが戻ってくると、飼養民たちは再び6~7人が一組となり、あちこち逃げまわる仔トナカイを囲い込み、投げ縄で捕まえる。そして、仔トナカイを母トナカイの近くに繫ぎ止める。その後、彼らは母トナカイを再び放ち、エサを食べ終えた母トナカイがキャンプ地まで戻ってくるとそれを捕まえる。そして、次に再び仔トナカイを放ち、それが戻ってくると数人で仔トナカイを捕まえ、木に繫ぎ止める。

この時期、飼養民たちはトナカイの母子を捕まえては放つ作業を繰り返すことで仔トナカイを人間に馴れさせるのである。飼養民たちは仔トナカイが「おとなしくなる」までこうした odachi 作業を続けるという。ここでいう「おとなしくなる」とは、人間が至近距離で近づいても逃げず、人間が両手で仔トナカイを持ち上げても暴れないようになるまでである。仔トナカイは何度も人間に捕まえられることで徐々に人間との間に親和性を確立させ、人間が近づいても恐れず、忌避反応を示さないようになるのであろう。こうした行動特性は、もちろん野生のトナカイにはみられない。

一方、飼養民たちは、生後間もない仔トナカイに odachi 作業ができず、そのまま成長した個体を jikei と呼ぶ。彼らが jikei と呼ぶ個体は人間に馴れておらず、人間が近づくと強い忌避行動を示し遠くに逃げてしまう。一般に、母トナカイが jikei である場合、その子も jikei になることが多いという。これは、jikei である母トナカイはキャンプ地から遠く離れた場所で子を産み、出産後もキャンプ地に近寄ってこない。

そのため、飼養民たちはその仔トナカイに odachi 作業がおこなえないからである。

とくに、jikei と呼ばれる個体は人間に馴れていないため捕まえようとしてもあちこち逃げる。また、投げ縄などで捕まえ数人の男性が取り押さえたとしても激しく暴れる。そのため、角を切る作業の際、jikei の発見と捕獲にはたいへん苦勞する。現在、飼養民たちは投げ縄で捕まえた jikei の個体に麻酔注射を打ち、動きが緩慢になったときを見計らって角を切る。

第3節 トナカイ飼養の背景

スカンジナビア三国やシベリアにおけるトナカイ飼養は、その生産活動によって肉を得るといふ目的で続けられており、その意味で肉食牧畜(carnivorous pastoralism)といえる[高倉 2012, 8]。一方、中国東北部・大興安嶺における現在のトナカイ飼養は、トナカイの角を採取するために続けられている。中国のトナカイ飼養民たちはトナカイの肉を食料とはみなしておらず、屠殺することはない。彼らは、毎年5~7月にかけて角を切り、それらを仲買人に販売したり、自らで加工した後に店舗で観光客に販売したりする³。これは、中国では加工されたトナカイの角に体質改善や体調維持の薬効があるとされ、中薬の一種として高い商品価値があるからである。北欧やシベリアと中国ではトナカイの飼育目的が大きく異なるのである。

以下では、大興安嶺のトナカイ飼養民にとって重要な収入源であるトナカイの角について、その商品化のプロセスや加工、販売の実際を著者の調査を踏まえてみてみたい。

エヴェンキ族らが奇乾民族郷に住み、大興安嶺で狩猟活動をおこなっていた頃、トナカイの角に商品価値はほとんどなかった。当時、交易の対象であったソ連人はヘラジカの角を購入していたが、それは室内の壁飾り用として価値があったからである。トナカイの角に商品価値を見出したのは1985年以降である。その前年、郷政府の幹部L氏がトナカイの角を北京の研究所に持ち込みその成分を調べた。すると、トナカイの角にはさまざまな薬効^{4(注4)}があることが分かった。この結果を受けた郷政府はトナカイの角を加工し、中薬の一種として販売することを決めたのである。その後、1993年頃から一般の人びとの間で中薬としてのトナカイの角の存在が認知され、それを購入する仲買人が増えたことで販売単価も上昇したという。

当時、郷政府はトナカイの角の専売制を実施しており、角の採取から運搬、加工、販売までの全過程を管理していた。毎年、5~7月になると郷政府は大興安嶺森林地帯に点在するキャンプ地に政府関係者を派遣し、飼養民たちが採取した角の重さと所有

者を記録し、すべての角を加工工場まで運んでいた。そして、加工後の角を仲買人や業者に販売していたのである。飼養民たちは、その年に政府に販売した角の重さに応じた金額を年度末（春節前）に受け取るようになっていた。郷政府によるトナカイの角の専売制は2011年まで続けられた。2011年以降、各々の世帯が自主裁量によって角を採取、加工、販売できるようになった。

さて、トナカイの角は以下のように加工され、商品化される。飼養民たちはまず切り取った角を70～80℃の湯のなかに短時間入れ、角の殺菌と血液凝固をおこなう。その後、湯から取り出した角を室内につるして乾燥させる。角が乾燥した頃に再び70～80℃の湯のなかに入れ、湯から取りだして乾燥させる。彼らはこうした煮沸殺菌と乾燥を繰り返し、最後に角が完全に乾燥するまで室内に吊り下げておく。その後、乾燥して軽くなった角を薄くチップ状に切って袋詰めにし、仲買人や業者に販売するのである。また、加工したトナカイの角を民族工芸品や中草薬と一緒に自宅で観光客に販売する世帯もある。

トナカイの角の販売価格は部位によって大きく異なる。トナカイの角は先端部分が一番良いとされ、その販売価格（加工後のチップ状のもの）は500グラムで1,000元（1元＝約13円、2012年8月時点）以上である。一方、角の付け根の部分は安く、販売価格は500グラムで100元前後である。また、角は大きくて軽く、弾力性のあるものがよいとされ、そうした角の価格も高い。トナカイの角は平均すると500グラムが400元前後で仲買人に販売されている（2012年時点）。

角の重さはトナカイの個体によって大きなばらつきがある。体格が大きなトナカイからは一頭あたりおよそ10キログラムの角がとれるが、体格の小さなトナカイだと一頭あたり1～2キログラムしかとれない。E民族郷でのトナカイの角の流通量は1998年に計548斤（1斤は500グラム）、2007年に1140斤であった[根河市史志編纂委員会2007, 107]。現在、個々の世帯が自主裁量で角を採取し、それを業者や仲買人に販売しているため、E民族郷全体で角がどれだけ流通しているのかは分からない。

おわりに

大興安嶺森林地帯におけるトナカイの飼養のひとつの特徴は、人間が接近しても逃げない馴化個体をつくることである。飼養民たちは、出産間もない母子に注目し、まずは人間との間に親和性が確立されている母トナカイを捕まえる。そして、捕まえた母トナカイをおとりにし、母トナカイからは離れないが人間を怖がる仔トナカイを大勢で囲い込んで捕まえるのである。飼養民たちは仔トナカイを捕まえては放ち、放し

ては捕まえる作業を何度も繰り返すことで個体に触れうる親和性を確立させるのである。彼らは、こうした技法を odachi と呼び、これによって人間に馴れた個体を” boracha” と呼ぶ。

この odachi の技法は、大興安嶺で生きるエヴェンキ族らが以前からもつ技術を現在に踏襲したものである。以前、エヴェンキ族らが狩猟をおこなっていた頃、彼らは数頭のトナカイを駄獣や乗用獣として利用していた。当時、彼らは森林内を頻繁に移動する必要があったため、交通手段としてのトナカイをたえず人間の手元においておく必要があった。そのため、彼らは狩猟活動に従事していた頃から人間を恐れない馴化個体をつくっていたのである。

一方、狩猟をおこなわない現在のエヴェンキ族は、役畜としてのトナカイをキャンプ地の近くに繋留しておく必要はない。しかし、彼らはトナカイの角を販売することで生計を立てるようになった。こうしたなか、彼らは所有するトナカイ群に対して odachi という介入を続けることで群れとしての輪郭を維持した上で、角の採取の際に簡単に捕まえることができる馴化個体の頭数を増やそうとしたのである。このように、トナカイの利用価値は駄獣や乗用獣といった移動手段から角の採取という生産対象に大きく変化したが、現在でも彼らは以前からの odachi 技法を踏襲しながら馴化個体をつくり生計を維持しているのである。

今後は、エヴェンキ族らのトナカイ飼養を下支えする郷政府の働きかけにも注目しなければならない。郷政府は、限られた集団内で交配を続けることによる近交退化を回避するためにロシアから新たにトナカイを導入したり、大興安嶺森林地帯で移動を繰り返すエヴェンキ族らに大型トラックやテントなどを提供したり、トナカイの角の新たな販売先を確保したりするなど、大興安嶺におけるトナカイ飼養を各方面で支えている。今後は、エヴェンキ族と地方政府や漢族との連携やほかの者の介入といった事実注目する必要がある。

もうひとつの課題はトナカイの飼養技術に関わる比較検討である。シベリア等での大規模なトナカイ飼養では、トナカイの移動習性に任せるかたちで飼育がおこなわれている。エヴェンキ族らもトナカイの舎飼などはせず、トナカイの移動習性に任せたかたちでの飼養を続けている。一方で、エヴェンキ族らは母子トナカイ、とくに仔トナカイに繰り返し接近することで人間との間に親和性を確立させ、人間が接近しても逃げない個体をつくる。もちろんトナカイ飼養をおこなうサーメの人たちも一定数の個体をキャンプ地に持ち帰って馴致された個体として利用する。今後は、こうしたトナカイ飼養の地域的な同質性と異質性、その差異を生み出す背景を考察する必要がある。

1 ツングース系言語を操る人たちは、ロシアのエニセイ川からオホーツク海に至る地域に広く散居しており、自称に基づいて北極沿岸のエヴェンと南方のエヴェンキという二つの民族に大きく区分される[岡・境田・佐々木 2009,252]。このなかで、中国のエヴェンキ族は1950年代に政府主導でおこなわれた民族識別工作によって認定された少数民族である。この民族識別は中国独自の方法でおこなわれたものである。そのため、エヴェンキ族としてひとつの民族集団にまとめられた人たちのなかには、ロシアの同じツングース系民族であるナナイやエヴェン、エヴェンキといった民族集団のそれぞれと生活習慣や言語といった側面で強い結びつきをもつ人たちもいる[岡・境田・佐々木 2009,174]。

2 満歸とはエヴェンキ語で「モンゴル人が以前に来た場所」という意味がある。満歸鎮は、根河市中心部から北に約200キロメートルの位置にある。鎮の総面積は3071.8平方キロメートルであり、森林被覆率は92.4パーセントに達する。満歸鎮の総人口は2万665人である(2005年時点)。住民の多くは漢族であるが、漢族以外にもモンゴル族や満州族、回族、ロシア族、朝鮮族などの少数民族が2,986人いる。

3 このほか、民族郷では観光を目的にトナカイを飼養する世帯もある。本稿ではそうした観光用のトナカイ飼養には触れない。

4 トナカイの角には「益気養血，強筋健骨，抗衰老，延年益寿。腰膝酸軟，滑精，子宮虛冷，神經衰弱，不眠，健忘等」といった薬効があるとされる。角はチップ状に加工されており、それを温水や酒のなかに入れて飲むと効果があるとされる。

参考文献

<日本語文献>

岡洋樹・境田清隆・佐々木史郎 2009. 『朝倉世界地理講座 2 東北アジア』朝倉書店.
高倉浩樹 2012. 『極北の牧畜民サハ』昭和堂.

<中国語文献>

根河市史志編輯委員會 2007. 『根河市志』呼倫貝爾 內蒙古文化出版社.
卡麗娜 2006. 『馴鹿鄂溫克人文化研究』沈陽 遼寧民族出版社.
孟琳琳，包智明 2004. 「生態移民研究綜述」『中央民族大學學報（哲學社會科學版）』
2004(6)48-52.
祁惠君 2006. 「馴鹿鄂溫克人生態移民的民族學考察」『滿語研究』2006(1)98-105.
秋浦 1961. 『鄂溫克人的原始社會形態』北京 中華書局.
王衛平 2012. 『社會變遷中的使鹿鄂溫克族』中央民族大學博士論文.
中國人民大會民族委員會 1958. 『內蒙古自治區額爾古納旗使用馴鹿的鄂溫克人的社會情況』北京 中國人民大會民族委員會.